

Carlo Cecchetto and Caterina Donati: *(Re)labeling*

Cambridge, Massachusetts: MIT Press, 2015. xiii + 190pp.

竹腰 敦

1. はじめに

Chomsky (1995) 以降, 併合 (merge) によって形成された統語対象物に対するラベル付け (labeling) がいかに行われるのかという問題が盛んに議論されている。この問題に対する本書の提案は簡潔で, ラベルを付与するのは探査子 (probe) であるというものである。そして, 語 (word) は内在的に探査子であり, ゆえに他の範疇と併合するときラベルを与える力を持っている点で特殊であると提案する。特に重要なのは, 語が移動して移動のターゲットと内的併合する場合である。この場合, 移動した語がラベルを付与することが可能となる。移動した語がラベル付けを行う場合, その移動が起こる前の段階でターゲットに付けられていたラベルとは異なるラベルが新しくできる統語対象物に与えられる。この操作を本書は再ラベル付け (relabeling) と呼んでいる。この提案は, ラベルを付与するのは移動のターゲットの方であるという従来の一般的な仮定と対立する。本書はこの大胆な提案を豊富な言語データに基づいて立証している。

本書の構成は以下のとおりである。1章は本書の議論において重要となる, 語とは何かという問題を扱っている。本書は, 語は語彙部門で生成され, 内在的に範疇素性を持つという語彙主義 (lexicalism) の立場を採用し, 語は統語部門で統語規則によって生成されるという分散形態論 (distributed morphology) に代表される反語彙主義の立場を否定する。2章では, 句構造理論の先行研究を批判的に検討し, 最終的に本書の提案するラベル付けの演算方法である探査

アルゴリズム (Probing Algorithm) が提案される。3章では、探査アルゴリズムに基づいて様々な関係節を分析し、関係節は再ラベル付けによって派生されるという提案がなされる。4章と5章は、探査アルゴリズムが島の効果 (island effect) と最小性効果 (minimality effect) の分析にもたらす帰結について論じている。紙面の都合上、以下では探査アルゴリズムとそれを用いた関係節の分析に焦点を絞り論じることにする。

2. 本書の概要

本書が提案するラベル付けの演算方法は (1) の探査アルゴリズムである。

(1) Probing Algorithm

The label of a syntactic object $\{a, \beta\}$ is the feature(s) that act(s) as a probe of the merging operation creating $\{a, \beta\}$.

これは要するにラベルを付与するのは併合の探査子として働く素性であるという主旨であり、内的併合と外的併合を区別せずに働く。本書はさらに、語は他の範疇との併合を強制する特性を持っているという意味で内在的探査子 (inherent probe) であると仮定する。そうすると、語は内在的にラベル付けの力を持っているということになる。

探査アルゴリズムに従うと、語がある探査子の素性照合のために移動し内的併合する場合、移動した語とその移動を引き起こした素性が共に探査子であるため、ラベル付けのあいまい性が起こる。その典型的な事例が自由関係節と間接疑問節である。(2) を見てみよう。

(2) a. I read [what you read]. (自由関係節)

b. I wonder [what you read]. (間接疑問節)

whatが埋め込み節の端に内的併合するとき2つの探査子が存在する。1つはwhat (内在的探査子) で、もう1つはC (wh素性の探査子) である。探査アルゴリズムによると、これら2つの探査子のどちらもラベルを付与することができる。whatがラベルを付与すると、新しくできる統語対象物はDP、すなわち自由関係節となり、Cがラベルを付与すると、それはCP、すなわち間接疑問

節となる。自由関係節では、移動のターゲットではなく、移動した語がラベル付けを行い、ターゲットのラベル (C) とは異なるラベル (D) を新しくできた統語対象物に与えている。これが再ラベル付けである。

内在的に探査子となるのは語である。したがって句が内的併合する場合、それがラベル付けを行うことはない。したがって、(3) の what book の内的併合によって生じる統語対象物 (what book you read) のラベルはCとなり、自由関係節となることはできない。

(3) a. *I read what book you read.

b. I wonder what book you read.

この分析に対しては、I read whatever book you readのように-everを用いた自由関係節が反例として思い浮かぶ。本書は、-ever自由関係節は次に述べる主要部外在型関係節 (externally headed relatives) であり、この分析の反例とはならないと主張する。

では本書が提案する主要部外在型関係節の派生を見てみよう。本書の分析は再ラベル付けの理論で修正した繰り上げアプローチ (raising approach) であり、(4) のとおりである。

(4) a. [CP [DP which book] John saw ~~which book~~]

b. [NP book [CP [DP which ~~book~~] John saw ~~which book~~]]

c. [DP the [NP book [CP [DP which ~~book~~] John saw ~~which book~~]]]

(4a) のように which は決定詞であり book とともに DP を形成し、節の左端に移動する。続く (4b) では、移動した DP 内から book のみが繰り上がるが、それは語であるので再ラベル付けを行い、新しくできる統語対象物は NP となる。(4b) でできた NP に決定詞 the が併合して (4c) が派生される。that 関係節の派生も細部には違いがあるものの、主要部の N が繰り上がり再ラベル付けを行うことによって派生されるという基本部分は同一である。また上述の-ever自由関係節は、主要部名詞が繰り上がり再ラベル付けを行った後、(4) の the に相当する決定詞である whatever が併合することによって派生される。

以上の分析は、関係節構文の主要部名詞は語でなければならないという帰結を生む。ところが実際には (5) のように関係節構文の主要部として句が生起

することはよく見られる。

(5) [DP the [NP [NP book about Obama] which you bought]]

そこで本書は、主要部名詞の修飾語 (about Obama) は主要部名詞 (book) が移動して再ラベル付けを行った後に後段併合 (late merge) されると提案する。この分析が正しいとすると、名詞の補部とされてきたものも後段併合されることになり、名詞句内の補部と付加詞の区別はできないことになる。この問題を本書は、名詞句内の補部とされてきたものは実は補部ではなく付加詞であり、項/付加詞の対立に見える現象は単に前置詞のタイプの違いに過ぎないと分析して解決する。この分析の証拠としては省略可能性、構成索性テスト、島の効果、再構築が挙げられている。

3. 課題と展望

本書で提案された再ラベル付けという操作は、従来の研究で説明が難しかった自由関係節の wh 語の特異な振る舞い、すなわち、wh 語が関係節全体の統語範疇を決めるという性質を簡潔に説明することを可能にする。また、自由関係節と主要部外在型関係節を統一的に分析できるという点も大きな魅力である。いずれも先行研究の批判的検討と経験的事実に関する精緻な議論を行っており、生成統語論研究に多大な貢献をなすものと評価することができる。

一方で、本書で提案された再ラベル付けという操作には今後の研究で明らかにしていかなければならない不明な点がいくつか残されている。その1つはその適用条件である。本書の提案では、語は内在的に探査子であるので、語が句と内的併合するときにはラベル付けのあいまい性が常に生じることになってしまう。例えば、(6)において語である he が主語位置に移動し内的併合するとき、he と T のどちらもラベル付けが可能なのはずであるが、実際には T しかラベル付けを行うことができない。

(6) [TP/*DP [D He] [TP is loved ~~he~~ by everyone]]

この例からもわかるように再ラベル付けという操作が適用される統語構造はかなり限られているように思われる。実際、本書で提案された再ラベル付けは種々

の関係節形成にかかわるものばかりである。関係節以外では再ラベル付けは起こらないのであろうか。起こらないとしたら、それはなぜか。こうした疑問に答えることは今後の大きな課題であろう。

本書で提案されたラベル付けの理論は、現時点ではまだ粗削りの段階であるが、極小主義プログラムにおける統語研究に新たな一面を付け加え、更なる発展を促す可能性を持っている。すべての生成統語論研究者にお勧めの一冊である。

参考文献

Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press.